

続 デスキャン隊！ がゆく！

当地で2回目の開催となる仙台・宮城デスティネーションキャンペーン（DC・25年4月～6月）。本コーナーでは、前回DC開催時に本誌で連載していた「デスキャン隊がゆく」の続編として、市内各地で行われている「おもてなし」や「仙台・宮城のファンづくり」に関するさまざまな取り組みをご紹介します。



（左から）語り部タクシープロジェクトリーダー 神田稔さん、（社）宮城県タクシー協会会長 佐々木昌二さん、同協会仙台地区総支部常任理事 高澤雅哉さん

「まちの顔」にふさわしい「語り部タクシー」をめざします。

「おもてなし」の心を学ぶ

宮城県タクシー協会では、タクシー会社の経営者や管理職を対象に、お客さまに良い印象を与える接客術や、おもてなしの心得を学ぶトップセミナーを開催。その成果を自社に持ち帰り、全社員と共有することでDCへの準備を着々と進めてきました。

「2回目のDCを成功に導くために、2月にリーダーの意識改革を目的とした研修会を実施しました。初めての試みでしたが、250名を超える仲間が集まり、『おもてなし』に対する意識の高

さを確信しました。DCは、おもてなしについて改めて考え直す良い機会になっているんです」と話すのは、宮城県タクシー協会会長の佐々木昌二さん。講演の中で、観光やビジネスで来た人は、まずタクシーに乗る。その時のドライバーの印象がそのまま、まちの印象になるのだという話を聞き、「タクシーはまちの顔なのだ」という責任を再認識したと話します。

継承すべきプロジェクト

これまでも地域社会におけるタクシーの役割を模索し、実践してきた同協会では、昨年11月からドライバーが被災地をご案内しながら、経験や教訓を伝える語り部タクシーの運行を開始しています。「震災から2年余りが経過しましたが、月日と共に風化する震災の経験を後世に伝えることも、地域の公共交通機関と位置づけられるタクシーの重要な責務であると考えました」と佐々木さんは、語り部タクシー誕生の経緯を話します。

震災直後、タクシー会社が独自に語り部タクシーを運行して

いるのを見て、とても良い活動だと思った佐々木さんは、「震災の経験は50年、100年と語り継ぐべき。タクシー業界全体で取り組もう」とプロジェクトを立ち上げました。現在、同協会に登録する27社、120人が協会公認の「語り部ドライバー」として活動しています。

同協会経営労務委員長の高澤雅哉さんは、語り部タクシーのドライバーが受講する被災地ガイド講習の実施にたずさわっています。「被災地も日々環境が変わっていますので、ドライバーのスキルアップ講習会を実施して、お客さまに喜んでいただきたい事例などを共有する場にしようと考えています。より良いご案内をすることで、防災意識を高める一助になればと思います」と高澤さん。

また、語り部タクシープロジェクトリーダーの神田稔さんは、利用者の方が多いのですが、「被災地を自分の目で見ることが大切だとは思っていたが、機会がなかった。説明を受けながら、この地に立つことができて良かったです」と大半の方が言ってくれています。今後は、被災地の方々が手づくりしたものを車内でご案内するなど、タクシー業界の

ことだけでなく、仙台・宮城の元気を支える気概をもって、語り部タクシーの責任を果たしたいと思えます。

お客さまが望む場所、所要時間などに、柔軟に対応できるタクシーの強みを生かして、観光客のみならず、地元企業にも防災意識の向上、さらには外部からの視察に対応するための社員教育の場として利用してもらうなど、DC期間にとどまらず、語り部タクシーを末永く継続していこうと意気込んでいます。



宮城県タクシー協会公認「語り部ドライバー」認定講習会の様子

震災「語り部タクシー」

（社）宮城県タクシー協会

仙台地区総支部

TEL 022-256-0356

ホームページ

<http://sentakyo.org>